保育者養成における保育技術向上のための一提案（２）
～保育現場で必要とされる弾き歌いの技術修得を目指して～

中武　亮子・後藤　祐子

A Proposal for Enhancing the Childcare Skills of Students in Childcare Training Programs（２）: Improving the Ability to Accompany Oneself While Singing as a Childcare Professional

Ryoko NAKATAKE, Yuko GOTO

Ⅰ　はじめに

中武・片野・後藤は、「保育者養成における保育技術向上のための一提案（１）」（中武、片野、後藤 2013 : 105 - 120）において、保育科の学生のピアノ技術向上の方策の１つとして、保育科の「器楽」、初等教育科の「音楽」で行われていたピアノの個人レッスンを、少人数によるピアノのグループ授業（週１回９０分）として行うという「新しい授業形態」を提案・実施し、その中間報告を行った。グループ授業の実施においては特に、幼児の歌の「弾き歌い」を実技試験に取り入れることで、学生のピアノ技術向上を目指すことに重点を置き、一定の効果が見られたことを報告した。

本論では、「平成２４年度保育科器楽Ⅰ・Ⅱに関するアンケート」を基に、グループ授業及び「弾き歌い」によるピアノのための指導法を検討するとともに、今後の「器楽」の授業における改善策を提案する。

Ⅱ　方法

１．「平成２４年度保育科器楽Ⅰ・Ⅱに関するアンケート」の実施
２．アンケート対象：宮崎学園短期大学保育科１年生１８３名、保育科２年生１６８名
３．アンケートの内容：資料２参照

Ⅲ　結果及び考察

１．学生自身の「器楽」の授業への取り組み

学生自身の「器楽」の授業への取り組みについて、６項目のアンケート結果を記し、それを基に考察を行う（図１、図２、図３、図４、図５、図６参照）。

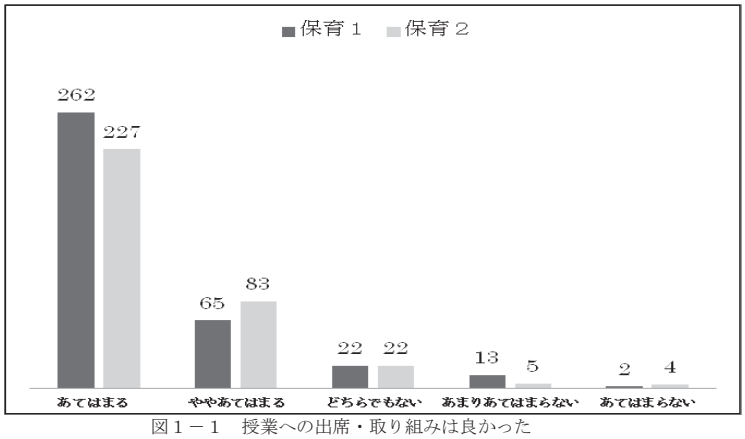

図１－１　授業への出席・取り組みは良かった

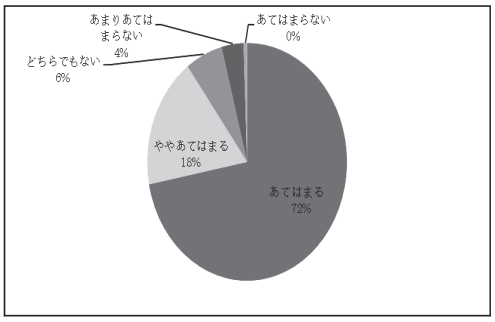

図１－２　保育１年 授業への出席・取り組みは良かった

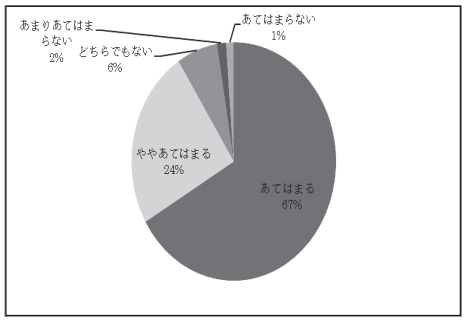

図１－３　保育２年 授業への出席・取り組みは良かった

まず、「授業への出席・取り組みは良かった」という問いに対し、『あてはまる』、『ややあてはまる』と答えた学生が１年生で全体の９０％（３２７名）、２年生では全体の９１％（３１０名）であった（図１－１、図１－２、図１－３参照）。

このことから学生の、ピアノ技術を身につけるため、１週間に１回設定されている「器楽」の授業への出席や取り組みが、極めて良好であったと言える。

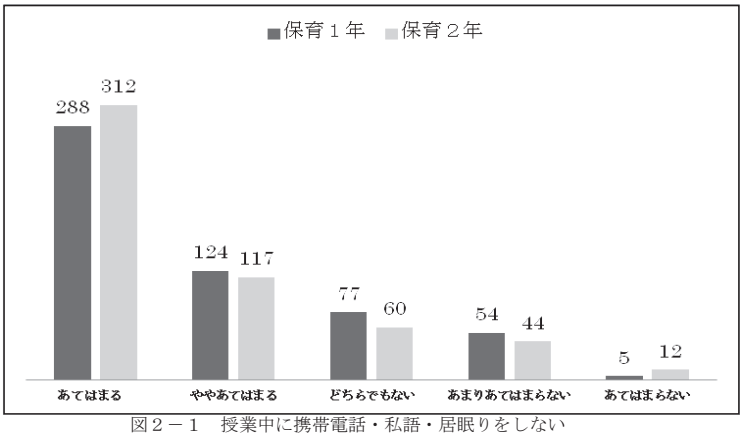

図２－１　授業中に携帯電話・私語・居眠りをしない

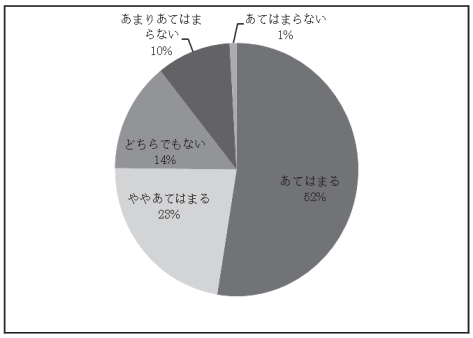

図２－２　保育１年 授業中に携帯電話・私語・居眠りをしない

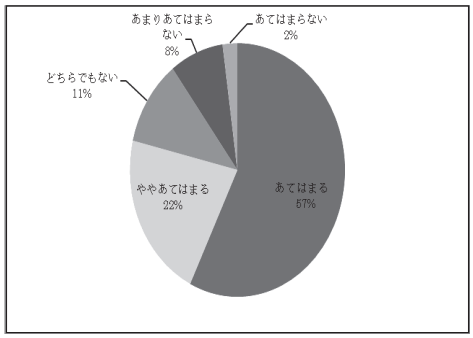

図２－３　保育２年 授業中に携帯電話・私語・居眠りをしない

また、学生の授業への取り組みの中で具体的な態度として挙げた「携帯電話を使わない・私語をしない・居眠りをしない」という３つの問いに対して、『あてはまる』、『ややあてはまる』と答えた学生が１年生で全体の７５％（４１２名）、２年生では全体の７９％（４２９名）であった（図２－１、図２－２、図２－３参照）。

この結果からは、授業への取り組みが良好な学生が多くいる一方で、授業に集中していない学生がいたことがわかる。これは、グループ授業とはいえ担当教員の目が一人の学生に集中する時間があったり、自分の順番が終わると気が緩む学生がいるためではないかと思われる。特に最近の傾向として、携帯電話を手放せない学生がおり、授業中の使用が禁止されているにもかかわらず使用する状況があったため、専用の入れ物を準備して授業の間は全員その中に携帯電話を入れてもらうような指導も行わねばならなかった。しかし、このことについては学生が「学びたい」と思える授業を行うための授業担当者の工夫も必要であると考える。

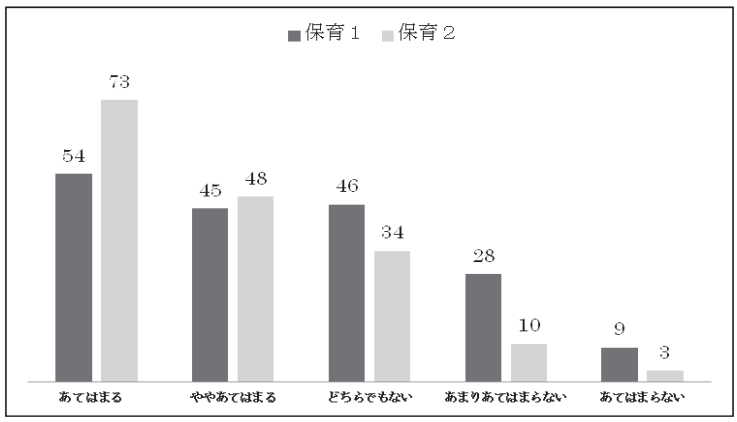

図３－１　器楽の授業が好き

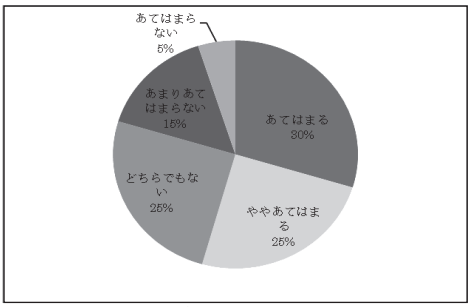

図３－２　保育１年 器楽の授業が好き

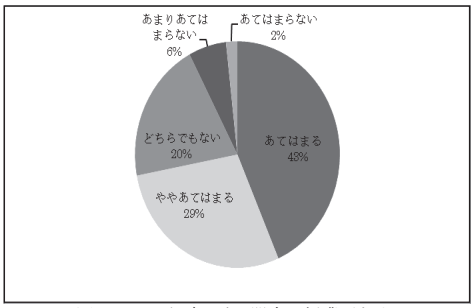

図３－３　保育２年 器楽の授業が好き

次に、「器楽の授業が好きである」という問いに対しては、『あてはまらない』、『あまりあてはまらない』という否定的な回答を１年生で全体の２０％（３７名）、２年生で全体の８％（１３名）がしているものの、『あてはまる』、『ややあてはまる』という肯定的な回答は１年生が全体の５５％（９９名）、２年生が全体の７２％（１２６名）であった。また、『どちらでもない』と回答した学生は１年生が全体の２５％（４６名）、２年生が全体の２０％（３４名）であった（図３－１、図３－２、図３－３参照）。

２年生は、この質問に否定的な回答をした学生の割合が１年生の半数以下であり、肯定的に回答した学生の割合が多い。これは、１年間のピアノレッスンを経た上で技術が身についてきたことや、現場で技術を活かすことができたことから、楽しさを感じることができるようになったためではないかと考える。１年生の結果は、慣れないピアノレッスンへの戸惑いであると考える。このことは、以下の「入学前ピアノレッスン経験」の結果からも推察できる。

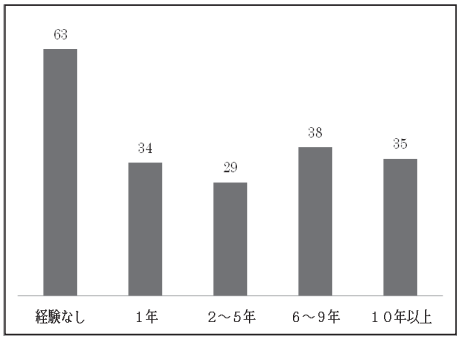

図４－１　保育科１年 入学前ピアノレッスン経験

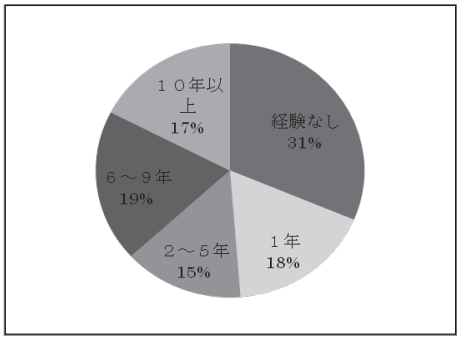

図４－２　保育科１年 入学前ピアノレッスン経験

さらに、「保育科１年生の入学前のピアノレッスン経験」の年数を尋ねたところ、全く経験のない学生が全体の３１％（６３名）であり、レッスン経験１年以下のいわゆる初心者を合わせると全体の４９％（９７名）であった（図４－１、図４－２参照）。

この結果から、１年生の約半数は入学直後の「器楽」の授業に不安を持っている

ことが考えられる。

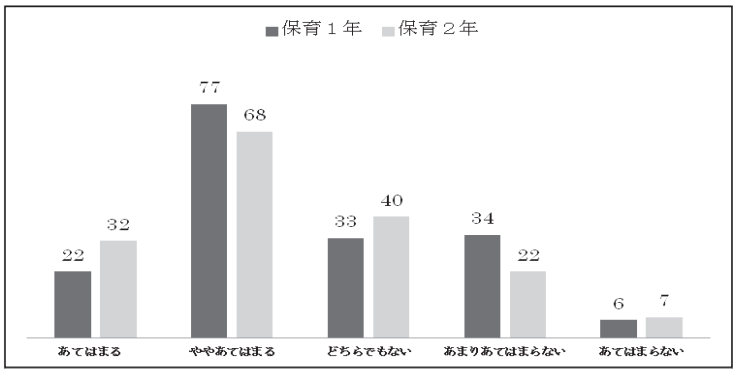

図５－１　よく練習して授業に臨んだ

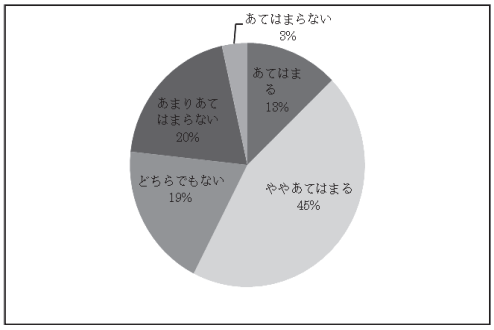

図５－２　保育１年　よく練習して授業に臨んだ

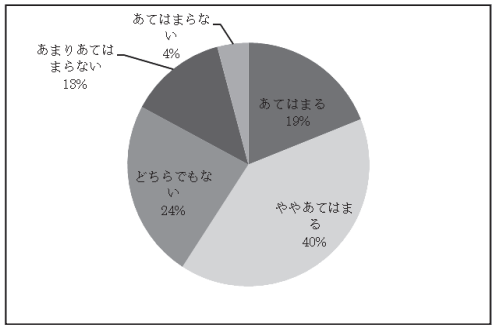

図５－３　保育２年　よく練習して授業に臨んだ

次に、「よく練習して授業に臨んだ」という問いに対しては、１年生で『あてはまる』、『ややあてはまる』と回答した学生が全体の５８％（９９名）、２年生では『あてはまる』、『ややあてはまる』と回答した学生が全体の５９％（１００名）であった（図５－１、図５－２、図５－３参照）。１年生、２年生共に半数以上の学生がよく練習をして「器楽」の授業に臨んだということであった。

しかし、「１週間当たりの練習時間」を聞いた問いに対して、５、６時間、中には７時間以上の練習をしている学生が１、２年生合わせて１８名いるが、１時間練習する学生が１年生で全体の２１％（３８名）、２年生で全体の２９％（４７名）、また、１週間の間まったく練習をしないという学生が１、２年生全体の２～３％いた。さらに、１週間に２時間練習する学生は１年生では全体の約２０％（４２名）、２年生では全体の約３０％（５５名）であった（図６－１、図６－２、図６－３参照）。

１週間の練習時間が０～２時間の学生が１年生で全体の４６％、２年生で全体の６６％という結果からは、学生の考える「練習時間」と、「実際に課題を仕上げるために必要な練習時間」とに差異があるのではないかと考える。

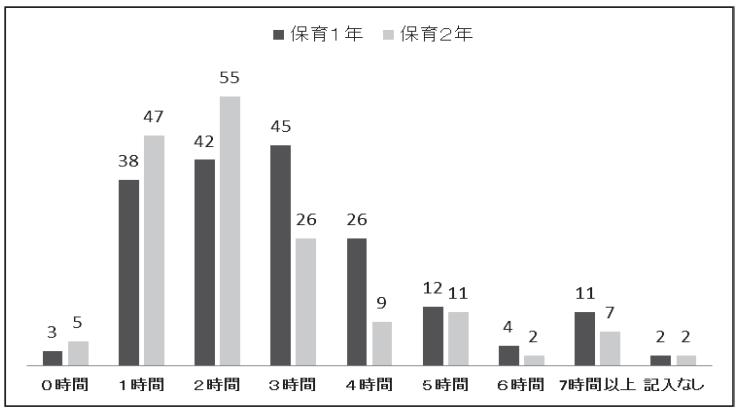

図６-1　１週間あたりの練習時間

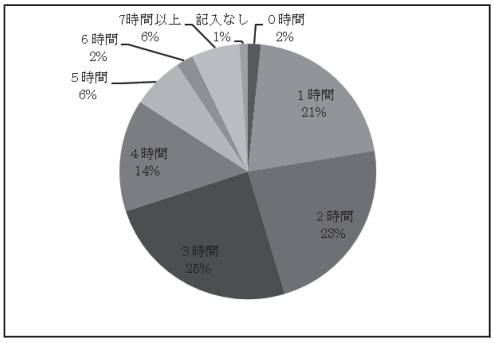

図６－２　保育１年　１週間あたりの練習時間

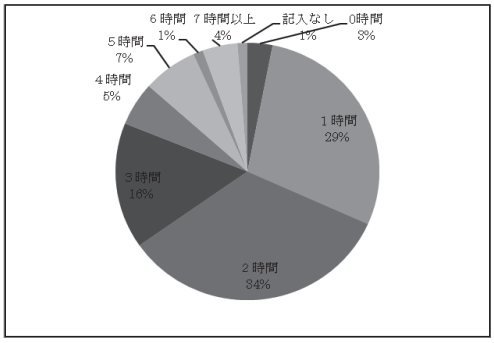

図６－３　保育２年　１週間あたりの練習時間

（２）「器楽」の授業内容について

続いて「器楽」の授業内容についてのアンケート結果を記し、それを基に考察を行う（図７、図８、図９、図１０、図１１、図１２参照）。

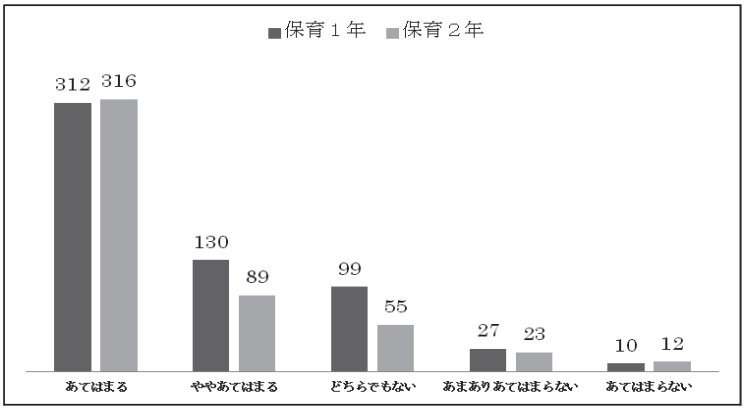

図７－１　教室の環境・シラバス・授業時間は適切であった

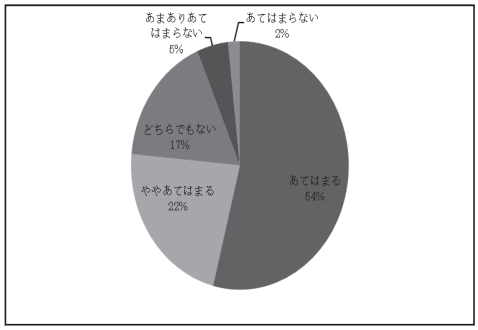

図７－２　保育１年 教室の環境・シラバス・授業時間は適切であった

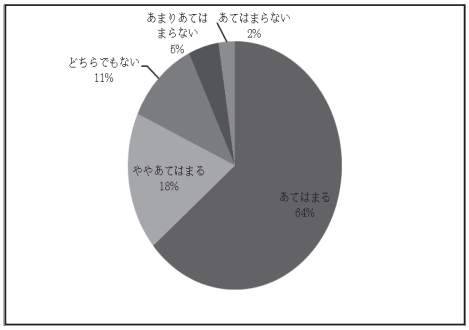

図７－３　保育２年 教室の環境・シラバス・授業時間は適切であった

まず、「教室環境・シラバス・授業時間が適切であった」という問いに対しては、『あてはまる』、『ややあてはまる』と回答した学生が、１年生で全体の７６％（４４２名）、２年生で全体の８２％（４０５名）であった（図７－１、図７－２、図７－３参照）。

この結果から、多くの学生は適切な環境でシラバスに準じた授業が時間通りに行われたと感じていたと思われる。

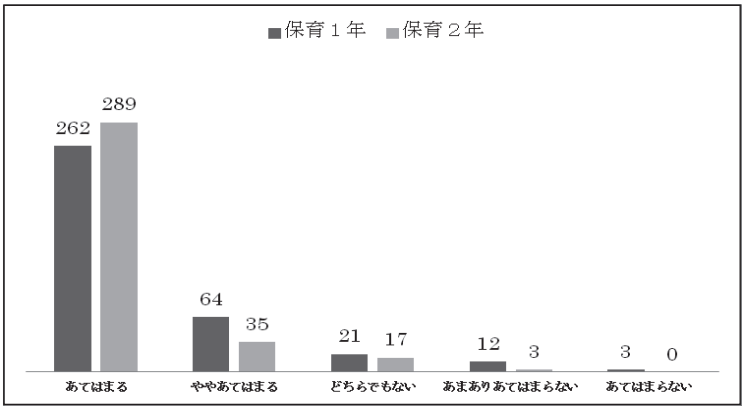

図８－１　教員の説明は分かりやすく内容は理解できた

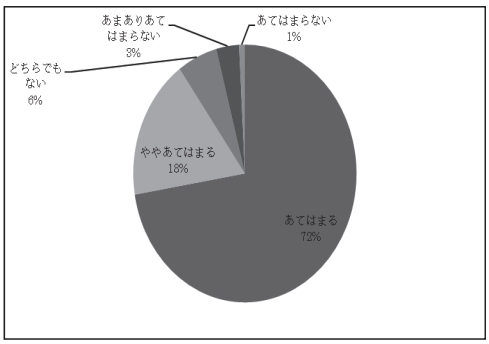

図８－２　保育１年　教員の説明は分かりやすく理解できた

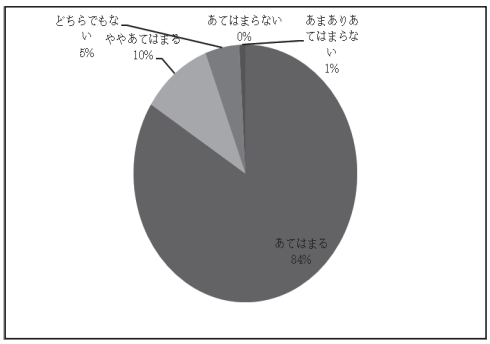

図８－３　保育２年　教員の説明は分かりやすく理解できた

また、「教員の説明は分かりやすく理解できた」という問いに対しては、『あてはまる』、

『ややあてはまる』と回答した学生は、１年生で全体の９０％（３２６名）、２年生で全体の９４％（３２４名）となっていた（図８－１、図８－２、図８－３参照）。この結果から全体の９割以上の学生は、「器楽」の授業内容が理解しやすいと感じていたと思われる。

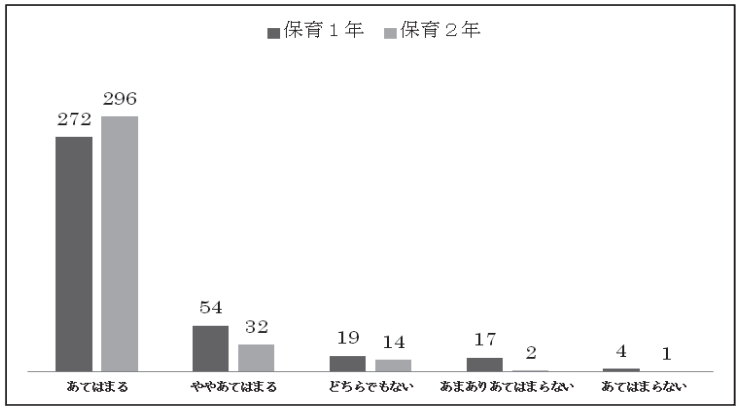

図９－１　教員は熱心で質問のしやすい授業だった

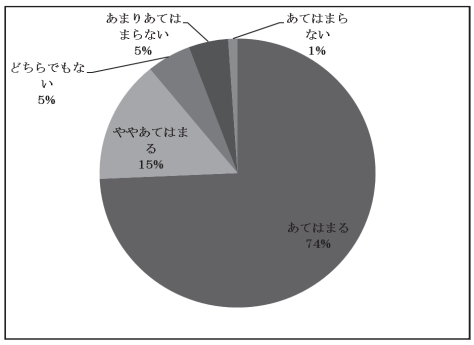

図９－２　保育１年　教員は熱心で質問のしやすい授業だった

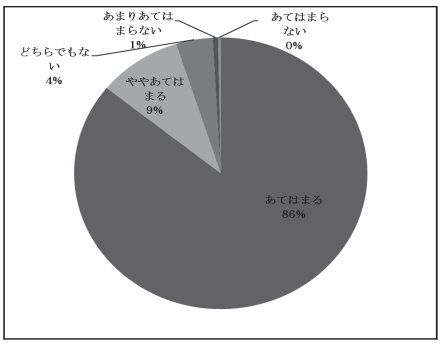

図９－３　保育２年　教員は熱心で質問しやすい授業だった

さらに、「教員は熱心で質問のしやすい授業だった」という問いに対し『あてはまる』、『ややあてはまる』と回答した学生が、１年生で全体の８９％（３２６名）、２年生で全体の９５％（３２８名）であった（図９－１、図９－２、図９－３参照）。

このことから、多くの学生は授業担当教員が熱心で質問のしやすい授業を行ったと感じたと言える。

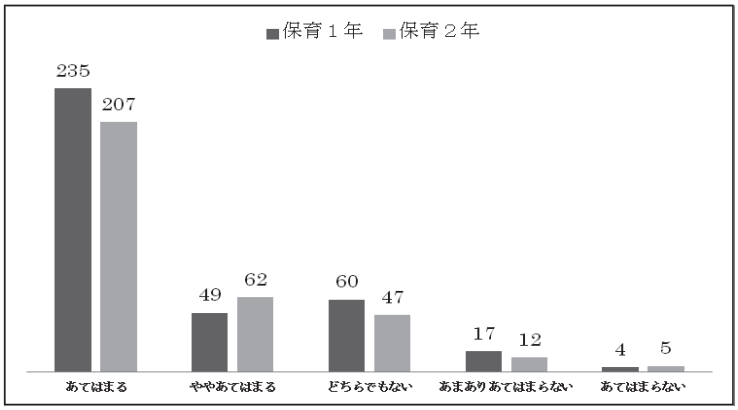

図１０－１　コードネーム・弾き歌いは必要である

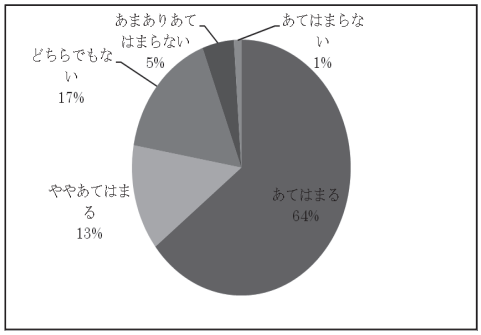

図１０－２　保育１年 コードネーム・弾き歌いは必要である

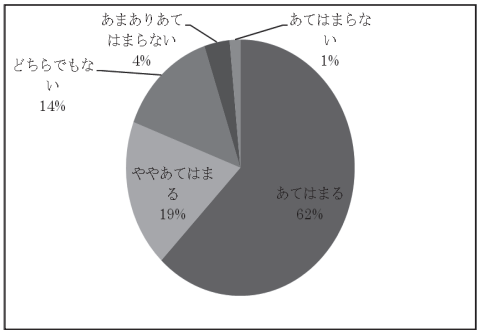

図１０－３　保育２年 コードネーム・弾き歌いは必要である

次に、「コードネーム・弾き歌いは必要である」という問いに対し、『あてはまる』、『ややあてはまる』と回答した学生が、１年生で全体の７７％（２８４名）、２年生では全体の８１％（２６９名）であった（図１０－１、図１０－２、図１０－３参照）。このことから多くの学生は、コードネームや「弾き歌い」について授業の中で学び、その必要性を感じていたと思われる。

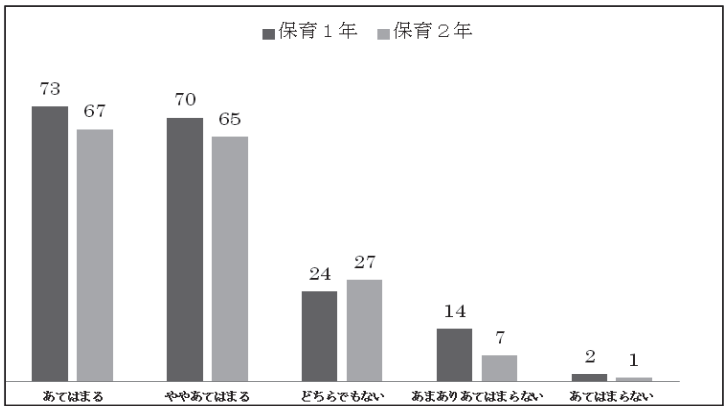

図１１－１　弾き歌いが出来るようになった

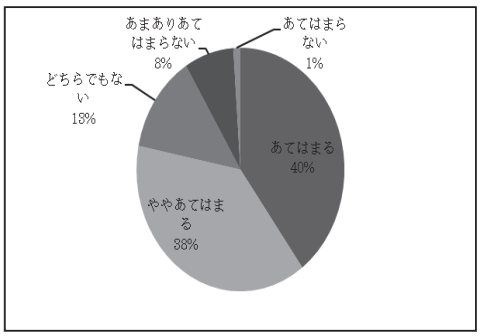

図１１－２　保育１年 弾き歌いが出来るようになった

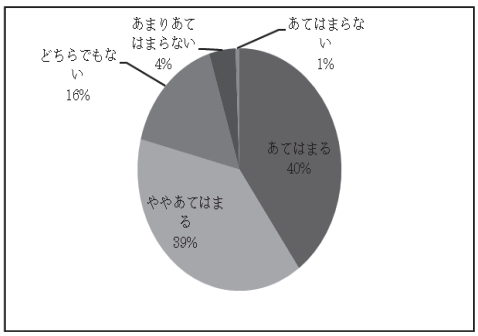

図１１－３　保育２年 弾き歌いが出来るようになった

また、「弾き歌いが実際にできるようになった」という問いに対して『あてはまる』、『ややあてはまる』と回答した学生は、１年生で全体の７８％（１４３名）、２年生では全体の７９％（１３０名）であった（図１１－１、図１１－２、図１１－３参照）。

この結果、多くの学生が「弾き歌い」を実践し、自分でも出来るようになったと認識していると言える。１、２年生共にこのような結果が出たことは、「器楽」の新しい授業形態で弾き歌いを必須の課題としたことの効果であると考える。

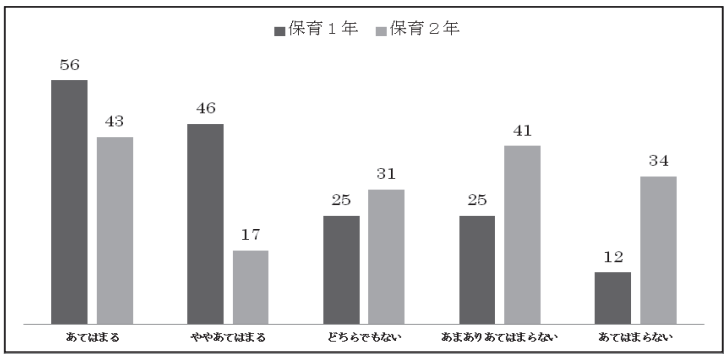

図１２－１　この授業形態は効果的であると感じる

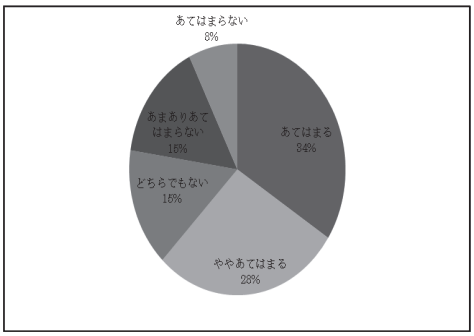

図１２－２　保育1年 この授業形態は効果的であると感じる

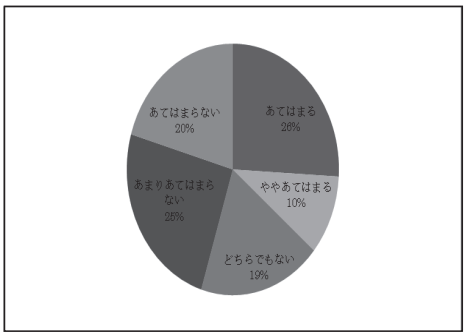

図１２－３　保育2年 この授業形態は効果的であると感じる

しかし、「この授業形態で行うことが効果的である」という問いに対して、『あて

はまる』、『ややあてはまる』と回答した学生は、１年生で全体の６２％（１０２名）、２年生では全体の３６％（６０名）となったが、『あまりあてはまらない』、『あてはまらない』と回答した学生が１年生で全体の２３％（３７名）、２年生では全体の４５％（７５名）であった（図１２－１、図１２－２、図１２－３参照）。

このことから、学生にとって新しい授業形態になったことへの不満が大きかったことがわかる。特に２年生の数値が高くなっているのは、前年度までと異なる形態への戸惑いを感じたためであると考える。

（３）自由記述の内容から

設定したアンケート項目とは別に、自由記述によるアンケートも実施し、主な意見を内容別にまとめた（資料１参照）。

資料１

自由記述の主な内容	保育科１年〔人数〕	保育科２年〔人数〕
①弾き歌いができるようになった	２９	１８
②ピアノの技術が向上した	５１	３８
③保育現場で役に立つ	８	５
④ピアノへの意欲が高まった	１５	８
⑤熱心・親切な先生との出会い	４０	２９
⑥他の人のレッスンで学べる	２４	２６
肯定的な意見の合計	**１６７**	**１２４**
⑦授業中の練習時間がなくなったことについての不満	３９	５８
⑧グループ授業の内容についての不満	７４	２０
⑨レッスンノートについての不満	１	８
⑩レッスン室についての不満	７	１
否定的な意見の合計	**１２１**	**８７**
自由記述の総数	**２８８**	**２１１**

①弾き歌いができるようになった

弾き歌いができるようになったことに関する記述は、１年生で２９名、２年生では１８名であった。１年生は「入学したばかりの時に比べると弾き歌いもできるようになったし、ずいぶん成長ができて良かった」と、純粋に自分の成長を実感した記述や、「小さい頃からピアノをしていたが、大学に入ってから弾き歌いをしなければならなくなり少し戸惑っていたが練習していくうちにたくさんの曲が弾き歌い出来るようになった」と、入学前にピアノのレッスン経験がある学生も、弾き歌いは別途練習が必要な技術であるため戸惑う場合もあるが、入学後に「器楽」の授業を受けることで不安が軽減されたことがわかる記述があった。２年生では、「今までは、弾き歌いがなか

ったので練習していなかったが、２年生になって弾き歌いをするようになって、実際に実習で役に立った」、「練習したり、先生の指導やアドバイスのおかげで、ピアノを使って子どもたちを楽しませることができた」などと、身についた弾き歌いの技術を実習等の際に活かすことができたと思われる記述がみられた。

②ピアノの技術が向上した

ピアノの技術が向上したことに関する記述は、１年生で５１名、２年生では３８名であった。１年生は「コードがよくわかった」、「音符がすこしずつ読めるようになった」、「以前より強弱を意識して弾けるようになった」、「伴奏の形が分かるようになった」、「弾くだけでなく、知らなかった歌を知り、歌えるようになるのが良かった」など、技術が向上したという具体的な記述や、「音楽のことについて全く勉強しないで入学して、保育士になれるのかと心配だったがこの授業を受けたことにより音楽についてある程度理解でき、ピアノも練習すれば弾けるようになった」と、未経験のピアノ演奏や弾き歌いが練習によって可能になることを実感し、ピアノに対する不安が減ったことも伺える記述があった。２年生では「昨年から器楽の授業を受けて、楽譜を見て弾けるようになった」、「様々な弾き方を知ることができる」、「たくさんのバリエーションの曲を弾けるようになった」、「表現力が付いた」、「スラスラ弾くと楽しいと感じた」など、基礎的な技術だけではなく、表現力や応用力も身についてきたと実感している記述が見られた。この力は、少人数グループで丁寧に行われる授業により身についたものであると考える。

③保育現場で役に立つ

保育現場で役に立つことに関する記述は、１年生で８名、２年生では５名と少数であった。１年生はまだ現場の経験が浅いものの、「保育士や幼稚園教諭として弾き歌いは必ず必要な事なので良かった」、「ピアノ初心者だったので、保育者を目指すにはすごくやりがいのある授業だと思う」など、自主実習で経験した現場をイメージしたり、保育者の実践を見たりしたことから感じたと思われる記述があった。２年生は、「この授業を受けて苦手だったピアノが少しずつだけど弾けるようになってきたし、実習のときの弾き歌いにもとても役に立った」、「自分の知らない童謡や子どもの歌などを知ることができた」、「歌詞があやふやだったり、知らなかったりしても、弾き歌いの練習をすることで正しく覚えることができるので良かった」、「今回の保育実習でも、『きくのはな』を知っていることに先生方からとても驚かれ感心された」などと、豊富な実習経験から実感したと思われる記述があった。

④ピアノへの意欲が高まった

ピアノへの意欲が高まったことに関する記述は、１年生で１５名、２年生では８名であった。１年生は、「みんなの音を聞いて、自分も頑張ろうと思える」、「ピアノの楽しさがわかるようになった」、「メンバーみんなで歌ったりして、楽しく活動が出来た」、「小学校２年でやめてしまって弾く機会もなかったが、この時間によってまたピアノへの関心が出てきて頑張ろうと思うようになった」、２年生では、「初めて見た楽譜も

弾いてみようと思える」、「じょうずな人のピアノが聞けて頑張ろうと思える」、「もっと子どもの歌をいろいろ弾いてみたいなという意欲を持つことができた」などと、共にピアノ技術の向上がピアノ演奏への意欲にも繋がっており、生き生きと意欲的に授業に取り組む様子が伺える記述が見られた。

⑤熱心・親切な先生との出会い

熱心・親切な先生との出会いに関する記述は、１年生で４０名、２年生では２９名であった。１年生は、「その人に合わせた指導をしてくれるのでとてもわかりやすいしありがたい」、「自分のしたい練習方法に合わせて指導して下さるのでいいペースで練習できるし集中できる」、「少人数だったので一人にかける時間がとても長く、どう工夫すべきか、注意すべきかを細かく教えてもらえた」、「自分たちの担当の先生がとても丁寧に指導してくださったので、短期間でもとてもピアノが弾けるようになった」、「先生が具体的な課題を与えてくださったので放課後などに練習するときの目標になった」、「先生と生徒の関係がとても良く楽しくレッスン出来ている」などと、技術面だけではなく、入学当初の学生のピアノへの不安を理解し、精神的にも支えながら指導が行われていたことが伺える記述が多数あった。２年生では、「今まで気付かなかったところをいくつも指摘いただき、練習にやりがいを感じる」、「ピアノをただ弾いているという感じで、表現力が足りないという事を先生に気付かせてもらいとても感謝している」、「担当の先生がわかりやすく教えてくださり、弾き歌いができるようになった」、「実践的な教え方で実際に使う事ができた」、「細かいところまで指導して頂き、リズムを正確に弾くことができた」、「子どもが歌いやすい弾き方を教えてくださった」などと、技術を身につける指導もさることながら、学生の心情面も掘り起こしながら丁寧に指導がなされている様子が伺える。本学の「器楽」の授業は、ピアノ演奏の専門家であり、保育音楽にも通じた教員が担当しており、学生の記述からも担当教員に対する厚い信頼が伺えるものが非常に多く見られた。

⑥他の人のレッスンで学べる

他の人のレッスンで学べることに関した記述は、１年生で２４名、２年生では２６名であった。１年生は、「私はあがり症なので、人前で弾くことは少し抵抗を感じていたが、毎週レッスンを重ねるごとにみんなの前で弾くことに慣れてきた」、「数人ずつで授業をするので良い緊張感を持つことができるし、学友のレッスンを一緒に聞くことによってたくさんの知識や練習方法を知ることができる」、「友達とお互いに良い点、悪い点を見つけることや、どんな曲なのか聴いて学べるので良かった」、「初めは自分のレッスンを聴かれて不快だったが、レッスンを通してメンバーとの交流も増え、また、わからないところは教え合うなどの交流もできた」などと、グループでの授業を自分の学びに積極的に利用しているコメントが見られた。２年生では「友達の頑張りを見て自分も練習しようと思う」、「メンバーがどのように弾いているのかを聞け、自分がどのように練習したらよいのかがわかる」、「みんなでいる安心感、みんなで歌え

る、色々な曲を弾ける」、「他の人の演奏を聴くことによって自分が間違っているリズムを知ることができる」、「歌をみんなで歌って、一人で歌うのとは違うと感じた」、「緊張感を持ってレッスンができた」などと、昨年と異なる状況の中で、多くの気付きや学びがあったことが伺える。

⑦授業中の練習時間がなくなったことについての不満

授業中の練習時間がなくなったことについての不満に関した記述は、１年生で３９名、２年生では５８名であった。１年生は、入学時からグループレッスンになったため比較のしようがないが、それでも「一人の人が先生にみてもらっている間、他の人は見とくだけというのは、時間の無駄だと思う」、「教えてもらったことや学んだことを一人で練習する時間がほしい」、「自分のレッスンは３０分もないから、待っている間空いている練習室で練習したい」、「みんなのレッスンをしている間待っている時間がもったいないと思った」などと、９０分間授業を受けるよりも自分のレッスン時間以外は練習の時間に充てたいという学生の意見が多くあった。２年生では、「時間がたつと忘れるし、その日に練習しないこともあるので指導されたことはすぐに練習した方が良い」、「自分のレッスン内容を記録するのはわかるが、メンバーの内容まで書く必要があるのかわからない」、「全員でずっとピアノの部屋にいるのは時間の無駄」、「２年生になって、１年と比べて練習する時間も少ないし、家のピアノが電子ピアノやキーボードだと普通のピアノと違うから学校のピアノで練習する時間は必要」、「練習する、しないは個人の問題だと思う」、「ピアノがない人にとってこの時間の練習時間はとても大事」、「遠方からきており練習は平日帰ってからは難しいので、レッスンの待ち時間に練習したい」、「大学生だから自己管理はしっかりできるので締め付けるのはどうかと思う」などと、昨年度まで練習時間が取れていたので、そのギャップに戸惑う記述が多く見られる。また、「３人ずつ入れ替わる」、「レッスンで指導を受けたところをすぐに復習したい」といった前向きな提案をしながら練習時間が欲しいという記述も見られた。

⑧グループ授業の内容についての不満

グループ授業の内容についての不満に関する記述は、１年生で７４名、２年生では２０名となっており、１年生は２年生に比べて高い数値である。具体的にはまず、「人のを見てもあまり参考にならない（特にバイエル）ので、その時間を有効に使えるようにして欲しい」、「他の人が実践している時の指導を聞いて自分のものにするとのことですが、レベルが違いすぎると意味がわからない」、「人のを聞いたり、自分の演奏を聞かれたら自信をなくす」、「変に上手い下手を意識してしまい、ピアノが少しプレッシャーになり、楽しむことができず、弾くのが辛い時があった」などと、グループ授業そのものへの不満の記述がある。また、「時間の配分をしっかりとして欲しいと思った」、「３０分オーバーになる時もあった」、「一人ひとりのレッスン時間が１５分と決まっているのにバラバラで、タイマー等を使って時間を把握して欲しいと思った」、

「５人を９０分でレッスンするのは時間が足りないと思う」、などといった、時間に対する不満もあった。担当教員については、「先生の、できる人と弾けない人への対応が違い過ぎた」、「携帯を触ったり私語をしても注意されないクラス、厳しいクラスとばらつきがある」、「予定のところまでいかなかったり時間がなくてアドバイスをもらえないことがあった」などといったものがあった。出される課題やレッスン内容については、「もっと曲が自由だったら楽しくなると思う」、「他の人のレッスンのときに寝たりしている人がいて有意義ではない」、「レッスンノートを書きたくても先生があまり注意点をおっしゃらないので、ノートが埋まらない」といった記述があった。１年生は、初めてピアノのレッスンを受ける学生も多いため、素直に困ったことを訴えて書いていると考えられる。２年生は、「グループなので、個人的な質問がしにくい」、「他の人にされる注意を聞いていても、自分のこととして捉えられない」、「メンバーのレッスン時間がまちまちである（後の人が短い）」、「毎回グループレッスンでなくて個人レッスンを入れて欲しい」、「一人のレッスン時間が短い（２０分ぐらいにして欲しい）」、「楽譜通りでなく、コードも覚えたかった」、「聞いているだけだと私語があるし、暇な時間が出来てしまう」、「ピアノが苦手な人は大変だと思う」などの記述があった。担当教員と学生との相性や学生の受け取り方にもよると思うが、教員側はこれらの意見を謙虚に受け止めて改善する必要があると感じる。

Ⅳ　全体を通しての考察

１．学生の授業への取り組みについて

今回学生に対して行った「器楽」の授業に対するアンケートの結果から、学生がピアノ演奏に対して苦手意識や不安があるものの、保育者としての専門技術として認識しており、その技術向上のために一人ひとりが自分なりの取り組みをしようとしている姿が見えてきた。その中で、保育科の１年生は、入学時にピアノのレッスン経験が１年以下の初心者が半数近くを占めており、何のためにピアノを練習しなければならないのか、自分はピアノを弾けるようになるのか、はっきりと実感できない中で授業を受けており、ピアノ演奏への不安が大きいことが考えられる。それが保育科の２年生になると、１年間「器楽」の授業を受けることで技術が身に付き、現場実習経験により、ピアノ技術の必要性への理解が深まることで不安が軽減され、「器楽の授業を保育に活かす」という目的意識を持って受講できるのではないかと考える。

２．「器楽」の授業の現状を考える

現場で使えるピアノ技術、特に「弾き歌い」ができる技術を２年間で身につけることは容易ではない。「器楽」の授業は９０分間を６人で受講する。以前は交代で入室する個人レッスンが行われていたので、９０分を単純に６で割ると一人あたりのレッスン時間は１５分であった。ピアノ演奏の専門家に個人レッスンを受けられることは

本学の学生にとって大きなメリットであり、２年間で驚くほど上達して卒業していく学生も多かった。しかし、このように、週一回のレッスンで技術を向上させていくには、学生一人ひとりが、課題として出された曲を両手で弾けるまでに練習してレッスンに臨む必要がある。その上で、担当教員から曲にふさわしい表現や、保育の遊びの中でどのように使っていくかの指導を受ける。ところが、学生の中には週一回のレッスン時間に、練習不足や譜読み（曲の形を捉えるための初歩）の段階で臨む学生も少なくなかった。そして、曲が仕上がらないまま次の１週間を過ごし、いつまでも同じ曲の繰り返しという悪循環の結果、技術が身に付かず、就職先の保育現場や実習先から「ピアノが弾けない」との指摘を受けることもあった。そこで、同じグループの６人の学生がお互いのレッスンを聴き合うことで９０分を学びの時間にする授業形態を取り入れ、技術向上を目指したのが現在の少人数によるグループ授業である。この授業形態の変更は学生から大きな抵抗を受け、授業担当教員にも大きな負担がかかった。

今回の学生へのアンケートの中にも多くの反対意見があった。最も多かったのは、「練習時間が減る」、「他の人がレッスンを受けている間に練習ができていたのにその時間がなくなった」というものである。練習時間を尋ねたアンケート結果からも、練習時間が０～２時間の学生が全体の２０～３０％いたことがわかっている。さまざまな事情を考慮しても、この練習時間では１週間分の課題を仕上げていくのは難しいと考える。また、その日のレッスンで指導されたことを、直後にレッスン室で復習して定着させるという有効な練習をする学生もいたが、一般的にピアノの練習は、授業が始まる前に終わらせておくものであり、自分が他の学生のレッスンが終わるのを待つ間、１５分～１時間程度付け焼刃の練習をしてもピアノの技術は身につかない。このように述べると、練習時間の少なさは学生の怠慢が原因であるように思われるが、一概にそうとも言い難い。家庭の事情で何時間もアルバイトをせざるを得ないため、練習時間が取れない学生が多くいるのも事実である。

３．「器楽」の授業・指導法の可能性

（１）練習時間の確保について

１週間に３時間練習する学生について考えた時、次のレッスンまで６日間の練習日があるとして、単純に１日に換算すると３０分は練習する計算になる。毎日練習はできないとしても、ある程度課題を仕上げていける最低ラインではないかと考える。また、厳しい条件の中でも１週間に４～７時間、それ以上の練習をしている学生もいる。このような中で、学生のピアノ技術を本気で向上させようと考えるならば、指導者としては、１週間全く練習をしない学生や、１～２時間しか練習時間のとれない学生を、いかにして３時間以上の練習の層に引き上げるかという方策を考えることが課題であると思われる。

２年間で幼稚園教諭免許と保育士資格をほぼ全員が取得する本学保育科の学生は非

常に忙しいという現状がある。また、県内各地から長い時間を掛けて毎日通学している学生も多い。そのような中で、帰宅後に練習時間を取ることが難しいということは理解できる。しかし練習は必要、ということであれば、学校にいる間に時間を作るしかないと考える。通常の時間割の空き時間に補講が入らなければ９０分が空くことになるので、その時間を利用することも考えられるが不定期である。定期的に使える可能性が高いのは昼休みの時間である。本学は、手作り弁当を持参し、昼食後に時間的なゆとりのある学生が多い。昼休みは学生にとってゆっくり休んだり、友達と交流したい時間ではあるが、１５分程度の時間をピアノの練習に使うか使わないかで２年後のピアノ技術に大きな差が出てくると考えると、学生に昼休みの時間をピアノの練習に向かわせることは、ピアノ演奏や弾き歌いの技術向上の方策の一つであると考える。

（２）グループ授業の可能性

これまでも、「器楽」の担当教員は授業中の指導法と共に、いかに練習をさせるかという問題に、長年取り組んできた。「練習しないのだから仕方がない」と放り出さず、放課後や空き時間に補いの時間を設定してまで指導してきた。そのような中、少人数によるグループ授業を行うことにはどのような意味があるのだろうか。

学生の自由記述にもあるように、授業においてはすでに、良い意味での競争が行われる中で、グループ内の交流が進むといった成果も出てきている。これは、担当教員が学生を個人として指導するとともに、グループとして指導することで、学生同士の交流が行われ、一人ひとりの生き生きとした学びに繋がっていることが考えられる。このことは練習への主体的な取り組みに繋がる可能性も大きいと考える。

また、反対意見として回答数の多かった「他の人の前で弾くことに負担を感じる」については、人前で話すだけでも緊張するのに、苦手なピアノを弾き、歌を歌えと言われればなおさらであろうと考える。しかし、ここにもグループ授業の中で行われる交流が良い影響を与えるのではないだろうか。保育科では子どもと一緒に音楽で楽しく遊ぶためにピアノを学び、人前で弾く経験を重ねることに意味がある。学生の自由記述の中にも、「友達と一緒に歌うことが楽しい」といった記述や、「自分の伴奏に合わせて友達が歌ってくれることが嬉しい」といった記述が見られる。改定前の授業形態では、実習や採用試験の際に弾き歌いの課題が出るまでは弾き歌いをする機会は少なく、その際も数曲を短い期間で練習して弾いていたため、弾き歌いの技術や必要性の認識は高くなかったと思われる。「器楽」のグループ授業を、人前で弾くことを楽しむ練習の時間として位置づけ、今以上に「弾き歌い」を楽しめる場にする必要があると考える。

（３）練習時間確保の指導の必要性

学生のピアノ演奏や「弾き歌い」におけるつまずきは、練習不足が最大の原因であると考える。「もう大学生は大人だから、そこまでしなくて良い」とはよく耳にする言葉である。しかし、ピアノの初心者ということは、練習の仕方も初めに指導する必要

があると考える。「練習時間がない」という学生は多いが、少しアドバイスをして後押しをするだけで練習時間が増える学生もいるのではないかと考え、以下のことを提案する。

ⅰ．プライバシーに配慮した上で学生の生活習慣の聞き取りを行い、練習可能な時間を探す。特に、朝の始業前、昼休み、放課後などに１０分、１５分程度でも隙間時間はないか検討する。

ⅱ．いつ、どこで練習するかを具体的に決めてレッスンノートに書かせ、実行できるよう支援する。その際、昼休み等の学内の滞在時間内にレッスン室を使用することを推奨する。

ⅲ．弾けるようになった曲をレッスンノートに明記し、時々弾くことでレパートリーとして定着させる。さらに、半期・年間のレパートリー目標数を決め、必ず到達させる。

ⅳ．以上のことを実現するために、レッスンノートの一部改定を行い、成果が学生にも目で見てわかるようにしたいと考える。

Ⅴ　おわりに

今回学生に行ったアンケート結果から、学生の声に耳を傾けることの大切さを感じた。筆者は「ピアノが弾けない」、「グループレッスンが嫌だ」といった否定的な記述を、ともすると「怠慢」という大雑把なひとくくりにして考えてはいないかと反省した。詳細に見てみると、そこには向上心や主体性からくる前向きな想いが多いことに気付かされた。

幼児期は、音楽を用いることで、遊びがより楽しくなる。ただ、少人数の子どもが相手であれば、保育者の歌う声や子どもの身近に寄り添えるような小さな楽器だけで活動を進めることが可能であり、効果的である場合も多いが、大人数の子どもたちとの活動においては、声や小さな楽器だけではエネルギーが足りず、表現の幅も制限される。そこで、ピアノによる伴奏や弾き歌いの必要性が出てくるため、演奏技術、歌唱の技術、音楽理論の理解が必要になる。さらに、音楽を使う活動には場をイメージし、遊びを創り出していく力、音を伝える力、子どもの音を受け取って返す力などが必要であり、ピアノの演奏にも同様の表現力が必要になる。保育者を志す学生が、豊かな音楽の表現力を身につけることで生き生きとした保育が行われ、次の世代を生きる子どもたちの未来に大きく寄与することを願う。そのために、今後とも学生の学びを支援していきたいと考える。

資料２

平成２４年度　　保育科器楽Ⅰ・Ⅱ　アンケート　　平成２４年１１月

１．自分自身の授業への取り組みについて、以下の質問に該当する数字を書いてください。

<①あてはまる ②ややあてはまる ③どちらでもない ④あまりあてはまらない ⑤あてはまらない>

質　　問	数　字
a．この授業への出席・取り組みは良かった	
b．授業中に携帯・私語・居眠りをしない	
c．器楽の授業が好きである	
d．入学前ピアノレッスン経験（1年生）	
e．よく練習をしてから授業に臨んだ	
f．１週間のおよその練習時間を記入してください	時間

２．授業内容について、以下の質問に該当する数字を書いてください。

<①あてはまる　②ややあてはまる　③どちらでもない　④あまりあてはまらない　⑤あてはまらない>

質　　問	数　字
a．教室の環境・シラバス・授業時間は適切だった	
b．教員の説明は分かりやすく内容は理解できた	
c．教員は熱心で質問のしやすい授業だった	
d．コードネーム・弾き歌いは必要である	
e．　弾き歌いができるようになった	
f．　この授業形態は効果的であると感じる	

３．以下の点について具体的に記入してください。

（1）この授業を受講して良かったと思った点

（2）この授業を受講して良くないと思った点及び改善点

参考文献

中島恵子・山下恵子
『音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー』2002 春秋社
中武亮子
「保育の音楽におけるピアノ技術―『弾き歌い』を行うことについての一考察―」
宮崎学園短期大学教育研究 2012：28－31
中武亮子・片野郁子・後藤祐子
「保育者養成における保育技術向上のための一提案（1）～保育現場で必要とされる
弾き歌いの技術習得を目指して～」宮崎学園短期大学紀要　第 5 号 2013 : 105－120
松井紀和
『音楽療法の手引き』1980 牧野出版